

満州

ノモンハンから終戦後二か年

人間万事塞翁が馬

愛媛県 三木 一之

―三木さんは機械化輜重兵の第一次初年兵だそうですが、勤務は満州ですか。

私は大正七年生まれ、昭和十三年徴集の現役で、十四年一月善通寺の輜重兵第十一連隊へ入営しました。機械化されたときで、徴兵延期した大学、高専の卒業者が多く、一期の検閲は満州東安省の密山で受けました。

自動車、鞍馬（輜重車を馬でひく）、駄馬（荷物を馬に駄載させる）を各一個中隊で、平時は一個連隊、三個中

隊ですが、戦時には一個中隊が三個中隊になるのです。

ノモンハン事件の時は初年兵で東安にいましたので（甲種、乙種の幹部候補生が合併して、牡丹江の自動車第二連隊で半年教育を受けた）、私は河野少尉のもとに原隊復帰した。連隊は戦時編成になっていました。いつでも出動出来る体制だった。ノモンハンの状況が悪ければ出動したのだが、九月停戦となったので運がよかった。その後、牡丹江の第二連隊へ帰り、そこでまた教育を受けました。

ノモンハンの時、自動車が一列に並んでいると、ソ連のミグ戦闘機が撃って来て、また反復攻撃する。自動車の側板が穴だらけだったのは弾痕だった。連隊葬が行われ「ああ悲しい哉、君は……」との連隊長の祭文が今でも耳にあります。

連隊からは何個中隊かが出動した。輜重は編成となればすぐふやせる。自動車と運転手があればよいから。荷台のうえに兵隊が十人（戦闘要員）ぐらい乗る。戦車が出てくると手旗で信号を送る。一、三分で戦闘体制にはいれる。一個中隊、大体三十台ぐらいか。後尾に修理車（二台でセット）があり、旋盤も熔接器も積んでいる。ちょっととした工場です。それを学校で教育を受けるのです。

私はエンジンの教育を受けた。メタルをとかしたり、けづったり、材料学等も勉強した。首席ででたのに、ちょっとやる気をなくしたことがあった。その後、整備科へはいったが、ここには大学、高専出でも幹部候補生にならない人もおり、それ等が先任になるので、最後まで一等兵。

その時、京大の法律の人と仲良くなって、任官しないように試験の時白紙で出したそうで、上等兵で帰ったが、戦争は好きでなかったような、左がかりの人だった。

——満州では匪賊討伐などあったでしょうが、訓練もきびしかったでしょう。

昭和十五年、満州軍が反乱して、興凱の東安省密山県の一個小隊ぐらいが重機関銃を持って山のなかへ逃げてしまった。我が軍も川辺少尉のもと一個小隊が出て包囲したこともある。

騎兵が夕方、炊飯中襲撃され、見習士官の小隊長は軍法会議にかけられたという話を聞いたこともある。

東安で百瀬中佐が連隊長の時、第十一師団が東安の密山から虎林へ行ったので、東安へ新設の部隊が来た。輜重第十一連隊（駄馬・輓馬中隊）も虎林へ移動した。我々の第三中隊（自動車隊）が残って、新設部隊に編入され戦闘や討伐のたびに歩兵を輸送した。そうしている時、関東特別演習（関特演）があって、私の部隊には年配の召集兵や、東北・北海道の初年兵が入隊して来た。輜重は戦闘力が弱いので歩兵より匪賊に襲撃されることが多く、かえって危険な時が多い。

満州の夏には石炭が自然発火するので、ガス抜きパイプを入れるが、熱くてやけどするようだ。また、冬は凍傷になる。零下四十度ともなれば、金物にふれば皮膚がとれてしまう。

自動車の冬期訓練で、エンジンかけても水分が残って
いればエンジンは止まる。ラジエーターとエンジンは十分
水をぬいておかなければならないなど、毎日が特別の演
習、演習の明け暮れで、討匪行や、敵と戦闘している方
が良いと思うことさえあった。

— 国境近くの駐屯はどうでしたか。

山の向こうはソ連領、出勤の命令で無灯火の訓練。運
転席の前のガラスは曇って真っ白、さがみえなくな
る。短剣でけずってもとけない。無灯火で前も凍ってみ
えない、一つ間違えば転覆、衝突だ。全神経を使つての
運転だからのちがいだ。

また、水上行軍もある。河の水が両方の陸から押し出
されて二階建てぐらい高くなる。それでも若かったの
で、マイナス二十度ぐらいでも、シャツ一枚ぐらいで訓
練していたが、温度が低くても、風がなければ平気だっ
た。

昭和十六年の秋頃だったか、日本軍が仏印へ進駐、そ
うこうしていたらハワイの攻撃。三年兵だったので「も
う駄目だ、帰れない」と思った。そのうち帰れそうだと

いう情報もあって喜んだりしていたが、十七年三月頃に
原隊復帰となり、東安から青森の第八師団かと思つた
ら、北海道旭川の第七師団に転属をした。

その頃、四月中旬に、米軍機の第一回本土空襲があつ
たが除隊することが出来た。

思い出せば満州では、ノモンハン事件はガソリンを詰
めた火炎ビンで戦車攻撃の訓練を受け、初期効果をあげ
たが、ソ連軍が戦車をディーゼルエンジンにかえたので
成功しなくなった。今度はアンパン地雷や竹ざおで爆薬
をキャタピラに突っ込む訓練など、肉弾攻撃の方法もか
わつた訓練をした。しかし、終戦の時の対戦車攻撃は成
功したのだろうか。

兵隊の時は、ソ満国境の陣地構築が行われ、あらゆる
方面に銃眼があり、幅広い軍用道路で東安から虎林まで
くらしい輸送していた。我々の二四〇部隊は、歩兵、騎兵
山砲・戦車・工兵などを持つ師団ぐらゐの編成だったと
思う。

下の兵隊では細かいことはわからなかったが、歩兵の
人の話では、その頃日本軍にも狙撃部隊が出来ていたと

いうが、日本のは大部遅れていたように思う。

除隊後、十八年四月再召集を受けたが、なんとか生きのび、終戦後苦勞して、昭和二十二年に帰国することが出来た。

思い返すと、私は三度死にそこなつた。人生觀は「人間万事塞翁が馬」である。戦争に参加した者は誰もが生死の境をさまよつて、生きて現在あることを切実に感謝していることであらう。

満州では軽機射手

再奉公は軍属で終戦

石川県 惣田 甚郎

―惣田さんは、体格ががっしりしているから現役でしよう。第九師団でしようから、満州ですか。

私は十三年徴集ですから、十四年の現役です。その時もう、満州の独立守備隊の歩兵だといわれ、広島に集合させられ、十四年十二月宇品港を出港しました。

部隊は、昔、渤海国の帝都だったという牡丹江省寧安県東京城というところにあった。奈良時代には「人」も貢物として送られたというし、浦島太郎の伝説もありました。日本人が昔からたくさん行つていて、交流があつたという。おそらくコロ島あたりか、錦州方面から行つたのではないですか。

私は、独立守備・独歩第二十大隊第四中隊に入隊したのです。一個大隊は四個中隊編成で、各中隊ごとに分屯して、第四中隊は東京城で、城内はかなり大きいまちでした。

そこで一期の教育を受け、教育がおわると各特業の教育をやる。大隊は歩兵ばかりではなく山砲、工兵、騎兵あらゆる兵種を持っていて、なんでもやれるよう二期の教育を受ける。私は歩兵の軽機関銃の射手で、最後まで特業なし、軽機関銃専門でした。

満州国が建国してからは平和だったが教育は厳しかったです、軍記は厳正でした。

―独立守備隊の独歩大隊というのは、どういう任務を持っているのですか。